

未来を支える税の役割

神戸市立烏帽子中学校3年 井上 陽翔

一九九五年の冬、阪神・淡路大震災が神戸を襲いました。私はまだ生まれていませんが、母は今もその時の話になると、少し黙ってから、こう語ります。

「電気も水も止まって、夜は真っ暗。どこからか助けてって声が聞こえても何も出来なかったのよ」。崩れた家、続く火災、割れた道路。どこにも安心できる場所なんて無かった中で、人々は見知らぬ誰かと声を掛け合い、励まし合いながら街を取り戻していったそうです。あれから三十年。私の通う学校は耐震化され、近くの公園には広い避難スペースや災害用の倉庫があります。ある日、防災訓練でその公園を訪れた時、母がつぶやきました。「この倉庫も、税金で造られているんだよ」。その瞬間、私は初めて「税って命を守る力なんだ」と気付いたのです。税金は、ただ「納めるもの」ではありません。誰かの命や暮らしを、静かに支える大切な仕組みです。道路、病院、学校、防災施設。いつもそばにある「当たり前」は、税によって作られています。今の日本では、少子高齢化が進み、医療や年金の負担が大きくなっています。一方で経済の成長は鈍く、国の借金は一人大たり一千万円を超えとも言われています。二〇一九年には消費税が一〇%に引き上げられましたが、それでも十分な税収とは言えません。最近では、仮想通貨や株の利益への課税、環境を守るための「カーボンプライシング」など、新しい税制度の議論も始まっています。社会や技術が変化の中で、税のあり方も進化していく必要があると感じます。また、税務行政も変わりつつあります。マイナンバー制度の導入や電子申告の普及によって、徴税コストの削減や脱税防止が進められています。これにより、税の「公平性」が少しずつ実現されつつあります。そして持続可能な未来を目指すSDGsの観点からも、環境にやさしい取り組みを後押しする税の役割は、ますます重要になっていくでしょう。私はこれまで、「税＝義務」と思っていました。でも、震災の話や、防災施設を目にしたとき、その見方が変わりました。税は、未来への備えであり、誰かを守るやさしさの形です。災害への対応、子育て支援、地方の活性化など、全てが税と繋がっています。これからの社会に必要なのは、政治や行政だけではなく、私たち一人ひとりが税について「考える姿勢」です。

「納める側」から「支える側」へ。その意識の変化が、未来を変えていくはずで
す。あなたの身近にも、税の力で守られている場所がきっとあるはずです。税金を通して、誰かの明日をつくる。私はそんな社会の一員でありたいと思います。